

## 無量壽莊嚴經について

柴 田 泰

現存せる無量壽經支那譯諸本、即ち、後漢支婁迦讖譯無量清淨平等覺經・吳支謙譯阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經・曹魏康僧鎧譯無量壽經・唐菩提流支譯大寶積經無量壽如來會・宋法賢譯無量壽莊嚴經（以後夫々平等覺經・大阿經・大經・

如來會・莊嚴經と略稱）の中法賢によつて九八二年より一〇〇一年の間に譯出された諸本の中では最も新しい莊嚴經について、昨年度の本學會に於いて特に本願文を取り上げ、同一系統の經典と考ふるならば形態の上からは二十四願經と四十八願經との中間に位すると云うよりは、四十八願經本願文をダイジェストした形態として、思想的には阿彌陀如來の衆生濟度の眼目を根底として淨土に生ぜ令められたる多様性のある所有衆生の功德莊嚴が展開され、然る後にその成佛を説く、と云う二重の構成が窺われる」と述べた。今回は更に本經全體の表現、内容、構造を検討し、その形態と思想の特異性を考えてみたい。本經は譯出者、譯出年代共、平等覺經・大阿經・大經のそれに諸説があるのに比して如來會と同様に明確

であり、梗概並びに全體的な他譯との相違は既に諸先師により述べられてゐるから、特に各章に示される特異性を數點取り上げて述べる事とする。

先ず作法苾芻の本願を誓う前迄、『明發心時』の過去佛を述べた後に、その時に作法苾芻有つて世自在王如來を嘆し、復廣大の誓願を發す、頌に曰く、とあるその偈頌の相違である。（大阿經は缺く）大經では此の偈頌は四言八十句あり、第二十八句迄が世自在王如來の徳を嘆し第二十九句以下が法藏菩薩の本願・平等覺經は五言八十句でやはり第二十八句迄が樓夷亘羅佛の嘆徳で第二十九句以下が法寶藏菩薩の本願・如來會は七言四十一句で第十六句迄と第十七句以下と同様に分けられる。本經は七言三十六句で世自在王如來を嘆ずる偈頌は第四句迄と極端に狭められ、第五句「願我得佛清淨聲……」以下作法苾芻の誓願に終始すると云う形態がとられ、師の佛の嘆徳並びに自己の功德、我國の莊嚴を誓う内容を持つ他譯に比して「爲彼群生大導師一度脫老死一令安穩」未度有

情令<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>度 已<sub>レ</sub>度之者使<sub>レ</sub>成佛<sub>一</sub>、「願我成<sub>レ</sub>就利<sub>二</sub>群品<sub>一</sub> 所有無邊世界中 輪廻諸趣衆生類 速生<sub>二</sub>我利<sub>一</sub>受<sub>二</sub>快樂<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>久俱成<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>」「……拔<sub>二</sub>有情<sub>一</sub> 度<sub>二</sub>盡阿鼻苦衆生<sub>一</sub>」と作法苾芻の利他行の色彩が濃厚であり、且つ「未度有情令得度 已度之者使成佛」「……衆生類 速生我利…… ……成無上道」と誓われている點は往生思想と成佛思想の二つの流れを明確に示していると言ふ事が出来る。

『明誓願』の段に於ける三十六本願文の形態並びに思想については前年度に述べた故省略するが、重誓偈には留意すべき點が見られる。此の偈は二十四願經に無く、大經五言四十四句、如來會七言四十八句、本經五十二句であるが、如來會の下四句は大經では散文となつてゐるから兩經は完全に一致する。本經は大經の散文に相當する箇所は下十句に相應するが「決定當<sub>二</sub>作佛<sub>一</sub> 廣利<sub>二</sub>衆生界<sub>一</sub>」と作佛のみを説く他譯の表現と異なる。内容は利他行を強調する點でそれ程異なつてはいないが「我若<sub>二</sub>成正覺<sub>一</sub> 立<sub>二</sub>名無量壽<sub>一</sub>」と説く一句は他譯には示されない表現である。此の句に續いて「衆生聞<sub>二</sub>此號<sub>一</sub> 俱來<sub>二</sub>我刹中<sub>一</sub>…… 亦以<sub>二</sub>大慈心<sub>一</sub> 利<sub>二</sub>益諸群品<sub>一</sub>」と説く點は他譯に異なり、第十六佛加教化願と相應して往生と往生せる者の利他行即ち往相還相の二重の構造が示される。又第四十二句「諸有情は一切皆成佛」と説かれる一句は本經の思想的特異性を端的に示す個所であらう。

無量壽莊嚴經について(柴 田)

更に『彌陀果用』中卷の終り迄は大別して 1 如來と聖衆の莊嚴 2 國土莊嚴 3 衆生の攝取とに分けられる。第一項では「彌陀如來の現在佛である事・光明無量の特相・淨土の聲聞無數とその譬え」を説くが「作法苾芻爲<sub>二</sub>是過去佛<sub>一</sub>・耶未來佛耶現在佛耶」と問うその答えとして「今已に成佛して西方に現在す」としか説かない大經・如來會に比して「彼佛如來無<sub>レ</sub>所來去無<sub>レ</sub>所去無生無滅非<sub>二</sub>過現未來<sub>一</sub>但以<sub>二</sub>酬願度<sub>レ</sub>生現<sub>二</sub>在西方<sub>一</sub>……」と説かれてゐる。此の箇所は池本重臣氏も指摘されているが、不去不來無生無滅の佛即ち法身佛を示す空思想の影響を持つと同時に「但以酬願度生現在西方」の報身佛としての彌陀如來を示している點に特色が見られる。もとより、因位の誓願によつて西方淨土に現在せる彌陀如來は報身佛と看做されるのではあるが、同時に法身佛の性格をも示す此の箇所は他譯と異なり留意すべき特徴と云えよう。引き續き如來會・梵本と同じく彌陀如來の光明無量を説くが、大經では淨土の七寶合成・山海三惡趣四季寒暖の無い事、その阿難との問答が挿入される。光明無量の後は本經・如來會・梵本共に聲聞無數とその譬えを説くが、大經は如來の壽命無限を挿入する。更に如來會、梵本は壽命無量を説くが本經では説かれない。従つて本經は如來會・梵本に關連性を見出せるが、彌陀如來の光壽無量の中、壽命は重誓偈に「立<sub>二</sub>名無量壽<sub>一</sub>」、『嘆正報』に「佛名<sub>二</sub>無量壽<sub>一</sub>」とある如

く、彌陀如來の二大特相の一つとして考えられているのでは無く、不去不來無生無滅（常住不變）の佛の・以酬願度生現在西方せる報身佛であるが故に一名稱として無量壽と稱せられており、他譯と異なつた表現と内容を持つてゐる事が知られる。第三項『攝衆生』では大經に於いては第十七・十八・十九・廿願の成就文として諸佛稱讚・念佛往生、三輩往生の思想と考えられ、支那・日本へと展開された淨土教史の中で最も重要視されて解釋された個所に相當するのであるが、他譯との比較に於いて見ると諸佛稱讚・念佛往生願の成就文に相當する個所は大阿經・平等覺經には見られず、本經では諸佛稱讚については大經・如來會よりも詳細に記され、念佛往生願の成就文に相當する個所は「於意云何欲令衆生聞彼佛名……求學生彼土」と十方諸佛如來の彌陀如來を稱讚せる理由として、十方諸佛如來の利他心として述べられてゐる。然るに三輩往生についての表現は大阿經・平等覺經に詳しく、次いで大經に明示されるが本經・如來會には明確な三輩の表現は示されず、いずれも「……即得往生極樂世界」不<sub>レ</sub>退<sub>二</sub>轉於阿耨多羅三藐三菩提<sub>一</sub>と結ばれてゐる。此の二點からは大經・平等覺經の關連性は強く、本經は後に示される『十方往觀相』の淨土稱讚の個所と同様に彌陀如來の稱讚は詳しく説かれ、更に本願文の第一惡趣來生願或いは全體を流れる利他行の強調・「一切皆成佛せ令めん」と説かれる思想

から三輩の差別は薄れてゐる形態と考えられる。

下卷に於いては上中卷で作法苾芻の因位とその果用が説かれたのに對して淨土菩薩の徳相並びに彌陀如來の勝相が説かれる。最初の『十方往觀相』は十方菩薩の淨土稱讚・往觀佛・問答に分けられるが本經は他譯とは異なつた形態をしてゐる。偈頌は本經七言四十句・如來會五言五十句、大經五言百二十句、平等覺經六言百二十八句であるが、流通分に概當する大經・平等覺經の偈頌、本經のみ散文で説かれる問答を除くと本經に相應せる他譯の偈頌は大經三十六句・平等覺經四十四句と四譯とも大體近い句數になる。然らば何故に本經のみは觀自在菩薩との問答が散文となつたのであるかが問題となるが、他譯では淨土に於ける彌陀如來との問答であるのに比して本經では「爾時世尊說此偈已會中有觀自在菩薩」と釋尊說法會中の問答となつており偈としては不適當の故である。此の事は淨土の菩薩聲聞の光明の徳を説く二大菩薩の個所に於いても大經・如來會・梵本が二菩薩を「過去に往生せり」と説くのに本經では「現居此界作大利樂」命終之後當<sub>レ</sub>生彼國」と現在此の世界に居る事と相應し、他譯と異なつた表現でも本經全體から見ても論理的に妥當し得る變化をしてゐる事が知られる。又此の問答は大經・平等覺經では單に放光の相についての問答であるのに比して、世尊の答の中に因位誓願の理由・果としての光明の徳相・「是故光明而入

佛頂」と結ぶ本經の表現はより明確な論旨を示している。

『行徳圓滿』については、南條博士の「五譯對照梵文和譯無量壽經」に依ると第三十五―七章に相當文無く第三十八章のみに相應させ、大經・如來會は十四の本願成就文として夫々に相應させているが、梵本第三十五―八章並びに大經・如來會の相應文三段は本經では一段として簡略化或いは省略化されて收められている如く思はれる。即ち「具足三十二相・智慧成滿深入三諸法……神通無礙……得不可計無生法忍」(大經)以下不更惡趣に續く一段は本經の「相好具足禪定智慧通達無礙神通威徳無不圓滿・深入法門・得無生忍」に相當し、次に不更惡趣は本經では本願文に無く又「淨土菩薩が他方國土に往きて供養し佛事を作し還つて成佛する」と云う本經の思想から考えても省略されたと考えられ、供養諸佛供具如意は此の一段の後の方に説かれ、残りの部分は梵本第三十八章に簡略化されてはいても夫々相應して示される。但し梵本・大經・如來會の如く四章或いは三段に同じ配列をしているわけではないが本經は一段で全てを説き、又本經全體の省略・簡略の多い形態上の特異性から考えても當然豫測し得る變化と思はれる。更に此の段の終りに「此諸菩薩我土五濁之所無有」と示される一文は他譯と異なつた表現であると同時に此の土を穢土として淨土と明確に對比している點で流通分の「莫令衆生墮在五趣・莊嚴獄中」と共に注意を引く

個所である。

以上の外に序分に見られる簡略化、『明發心時』の過去佛の遠近と譬喩の省略、『因位行相』の結語の相違と供佛の五重に亘る表現、『佛國土莊嚴』の無比徳を明す表現並びにその思想内容、五惡段の缺除、胎生化生についての遠離分別と執着分別の思想、流通分の往生と成佛の思想等が本經の形態並びに思想を示す問題として提示されるがそれ等は省略する。

此等の諸點並びに本願文の形態内容、更に他譯の中、大阿經が最も古い形態であり、平等覺經と大經の類似性、本經とは大經より如來會にその類似性を見る事を考え合はせると、本經の形態は大阿經・平等覺經と大經・如來會との中間に位すると考えるよりは、大經・如來會を適度に省略或いは轉化させた最も新しい形態と考えるべきであろう。又思想的には他譯と異なる個所も經典全體としては論理的矛盾は見られず彌陀如來の勝れた利他行により、衆生を我が刹に往生せしめ、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんと隨所に説かれてゐる如く、大乘佛教の眼目たる成佛思想と淨土教思想の根底を爲す往生思想とが明確に調和して表現された經典として、無量壽經諸本の中でも特異な立場を占めてゐると云えよう。

- 1 印佛研第十一卷一號一一九頁―二〇二頁
- 2 内容文科は「莊嚴經毛諦記」より依用
- 3 龍大論集第三六七卷「無量壽經諸本の成立」